

草の乱

2004(平成16)年11月13日鑑賞(ホクテンザ1)



監督＝神山征二郎／出演＝緒形直人／藤谷美紀／杉本哲太／田中好子／林隆三（映画「草の乱」製作委員会配給／2004年日本映画／118分）

……1884年の「秩父事件」を知っている人はかなりの歴史好き！ この時代、そしてこの事件の争点は、明治政府 VS. 自由民権運動。薩長を中心として成立した明治政府はいかにして近代国家を成立しようとしたのか？ またその中でなぜ多くの貧しい人民たちが犠牲になったのか……？ 歴史上の悲しい必然性(?)をしっかりと勉強しておきたいものだ。

日露戦争100年、日米和親条約150年

今年2004年は何かと節目の年となっている。第1は1904年～1905年の日露戦争。その開戦100周年にあたる今年は、産経新聞を中心として各種の特集が組まれている。また日清戦争はその10年前の1894年からだし、日本の浦賀沖にペリーが来航して強引に開国を迫った結果締結された日米和親条約は1854年だから、それは今から150年前のこと。なお1867年の大政奉還を経て、明治政府が成立したのは1868年。

そんな流れの中、1884年埼玉県秩父郡下吉田村で発生した秩父事件は、今から120年前のことだ。

なぜ今、秩父事件が……？

そんな秩父事件に焦点をあててこれを映画化したのは自主製作運動によるもので、『郡上一揆』(00年)を自主製作運動によって映画化した神山征二郎監督を中心としたもの。そしてその製作費4億5千万円は、自主製作映画としては過去最高のものとのこと。

映画「草の乱」製作委員会には、茨城映画センターなどの名前が連ねられているが、そのほとんどは聞いたことのないものばかりだし、地元を中心とした協力、協賛、後援も名もなきものが多い。しかし何千、何万人という貴重な人々の支えがこの秩父事件を今、映画によって蘇らせたことはまちがいない。朝日新聞(2004年11月17日朝刊)は、「関西人も多額出資」という見出しで大阪市内での上映を書いたが、これはこの映画のこういう特徴を読者に知らせたかったためだろう。私としてはこういう取り組みをもっともっと広げてほしいと願っているが……。

『ラストサムライ』と『草の乱』

渡辺謙、真田広之、小雪らが出演したハリウッド大作『ラストサムライ』(03年)は美しく迫力ある映像で大人気となったが、そのストーリーの根本は西郷隆盛を中心とした西南戦争。そしてそのテーマは、明治政府が成立し、日本が近代国家の道を歩み始めた中で抵抗勢力とみなされた土族=サムライたちの反乱とその美学だ。

この西南戦争が勃発したのは1877年。秩父事件の発生はその7年後の1884年で、明治政府の圧政に抵抗する戦いであったことは西南戦争と同じだが、その主体は全く違うもの。

すなわち、この秩父事件で政府に抵抗して決起したのはすべて貧しい農民であり、蚕を飼い生糸を売って生計を立てていた人たちだ。

彼らは、このまま座して死を待つだけという極限状態に追い込まれているにもかかわらず、何ら対策をとらず高利貸しの横暴を見逃すばかりの政府=官に対して、展望のない「武力蜂起」を試みたのだった。

それを指導したのは、秩父困民党総理の田代栄助(林隆三)と副総理の加藤織平(杉本哲太)、そしてこの映画の主演である困民党会計長の井上伝蔵(伊藤房次郎)(緒形直人)ら。彼らは決して革命家でもなければ思想家でもない。単に困窮し死んでいく周りの人々を救いたいという思いから立ち上がっただけの人物。

これは逆に言えば、秩父事件における「困民」たちの蜂起はその程度のものにとすぎなかったため、秩父事件はわずか数日で壊滅され、指導者たちはみな悲惨な

結果となったのだが……。

自由民権運動とは？

自由民権運動という単語は知っていても、近代史・現代史を軽視している（？）現在の日本の歴史（日本史）教育の状態では、その内容はほとんど知られていないはず。

もっとも、板垣退助、後藤象二郎、大隈重信らの名前は伊藤博文や山県有朋らとともにわりと有名……？

板垣退助を党首とする自由党が結成されたのは1881（明治14）年であり、大隈重信を党首とする立憲改進黨が結成されたのが翌1882（明治15）年。

自由民権運動は、板垣退助、後藤象二郎らが1874（明治7）年に民選議員設立建白書を政府に提出したことに始まったもの。

そして政府が1881（明治14）年の国会開設の勅諭によって10年後の国会開設を約束したことを受けて、地租の軽減、不平等条約の改正、言論と集会の自由の保障等の要求を掲げて展開された政治運動・社会運動が自由民権運動と呼ばれるものだ。

以降、1889（明治22）年の大日本帝国憲法発布、翌1890（明治23）年の第1回総選挙、第1回通常議会議会招集、大日本帝国憲法施行に至っていくことに。

しかし、板垣退助は1882（明治15）年に岐阜で遊説中に凶漢に襲われて負傷した（「板垣死すとも自由は死せず」の名文句は有名）ことや、この映画のテーマである秩父事件をはじめとして「過激」になってきた自由民権運動を指導できなくなったため、1884（明治17）年自由党は解散した。

また大隈重信は、外務大臣になって入閣することによって政府内に取り込まれ（？）、立憲改進黨は穏健化してしまった。

その結果、この映画にも登場する伊藤博文（山本圭）や山県有朋（原田大二郎）らの「主流派」が「勝ち組」となって大日本帝国憲法施行に至り、そしていよいよ1894（明治27）年からは天下分け目の大いくさである日清戦争に突入することになったわけだ。

これくらいの歴史は、今の若者も十分勉強をしておく必要があることが明らか

だが……？

興味深い人物像 その1——井上传蔵

この映画の主人公・井上传蔵は丸井商店の店主であるとともに、下吉田村の議会の議員であり、副議長になった人物。こんな井上传蔵が最終的に困民党の会計長として秩父事件のリーダーの1人となったのは、蚕を飼い生糸を売って暮らしを立てている村民たちの生活が立ちゆかないことに対する義憤から。

秩父事件によって死刑判決を受けながらも北海道に逃れ、1918（大正7）年に死亡するまでの33年間を伊藤房次郎として生き抜いたうえ、二度目の妻・高浜ミキ（田中好子）をめとり、息子までもうけた井上传蔵の生き方は壮絶そのもので、実に興味深い。

興味深い人物像 その2——田代栄助

井上らが頼み込むことによって秩父困民党の総理となった人物が田代栄助。井上传蔵より20歳年上で、大宮郷の名主の家に生まれた田代は、パンフレットによれば「代言人」とされている。田代栄助の人物像は、この秩父事件によって逮捕された後の大宮郷警察署での尋問調書から明らかになるもので、それによれば「強きをくじき、弱きを助けるを好む」と自ら述べていたとのこと。

代言人とは、今の私の職業である弁護士の原型と言われているものだが、その詳細を私はよく知らない。しかし尋問調書によれば、彼は養蚕を営むと同時に資格なしの代言人をつとめていたらしい。そうするとその仕事上の経験から、金貸しによって強引な取り立てを迫られた農民たちを助けるということが秩父事件参加の動機だったことはまちがいないだろう。

また私には正確にはわからないが、私が勉強した資料の中には、この田代栄助は「ばくちうちの親分」だったという説明もある。

「博徒」という言葉は後のヤクザや任侠道にも通じるものだが、この映画における田代栄助の風貌や行動パターンをみれば、代言人というよりはこちらの方がピッタリ感じ……？ そして、これが面白いことに、私には現在の日本の内閣総理大臣・小泉純一郎のおじいさんとして有名な「刺青大臣」小泉又次郎のイメ

ーじと重なるのだが……？

「刺青大臣」小泉又次郎とは？

2004年11月17日、私は出張先の横浜からの帰り道、新幹線のぞみのグリーン席のイヤホンを通じて、ラジオでの自民党総裁である小泉純一郎総理大臣と、民主党の岡田克也代表との約1時間にわたる党首討論を興味深く聞くことができた。

小泉純一郎のおじいさんにあたる小泉又次郎は、現在の横須賀において1865年に生まれ海軍軍人を目指したものの、とび職の棟梁であった父・由兵衛はそれを許さず、稼業の「小泉組」を継がせようとしたらしい。そのため又次郎はやむなく全身に龍の刺青を入れて、軍人志望を断念したとのこと。

この又次郎が政治家となったのは、1903（明治36）年神奈川県議員への当選が最初で、1908（明治41）年には41歳で衆議院議員となったが、その属する政党は政権与党の政友会ではなく、野党の猶興会。

又次郎は1920（大正9）年以降、普通選挙実施のための運動に精力を注ぎ込み、1925（大正14）年やっとその実現をみたが、彼の書いた『普選運動秘史』（昭和2年刊）はその渾身の著作として今に残っているとのこと。

そして又次郎は衆議院副議長、立憲民政党幹事長、浜口幸雄内閣の通信大臣等を歴任し、横須賀市長までつとめている。

この小泉又次郎は議員在職37年、純一郎の父・純也は25年、そして純一郎は33年目。合わせて94年間3代にわたって日本の議会政治の中に身をおいてきたというのはホントにすごい話。希有な政治一家というべきだ。

若いときから郵政民営化を主張していた小泉純一郎総理大臣が、道路公団改革が実現（？）した今、郵政民営化に執念を燃やすのは又次郎が普通選挙の実現に執念を燃やしたのと同じだろう。

そしてまた丁々発止の議論を展開したり、意外に（？）したたかなねばり腰を見せるのも、この小泉家3代にわたる政治家の資質によるものだろう。

武装蜂起に至るまでの活動は？

生糸の生産でうるおっていた秩父郡の村々が打撃を受けたのは、1881（明治

14) 年に大蔵卿となった松方正義によるデフレ政策と、山県有朋による軍備拡張のための増税策の実施によるもの。

今日なら、このような「政策テーマ」は、国会における議論や国政選挙の実施によって選択されていくものだが、普通選挙のなかった明治時代の政治では、薩長閥の政治家による政策が強引に押し進められていた。

こんな状況の下、1881（明治14）年に結成された自由党は前述の要求を掲げて活動を展開した明治16年までに、秩父郡には10名の自由党員がいたとのこと。そして彼ら自由党員が困窮する農民を救うためにとった行動は、

- ①秩父郡役所による負債措置年賦返済の「高利貸説諭請願」
- ②大宮郷警察署への「高利貸説諭方請願」
- ③高利貸との個別集団交渉

しかし①②はいずれも却下され、③の合意は成立せず、八方ふさがりの状況となった。

自由党員たちがこの時代の状況下の中で考える方法は、たしかにこんな程度のものであろう。そしてその実現を目指して活動している姿にはたしかに心打たれるものがある。しかし所詮その実現が難しいことはわかっている。そして現実合法的な活動が日の目を見ず、万策尽きた後、彼らを選択した道は……？

武装蜂起の選択とその悲しい結末

武装蜂起を決断した自由党や困民党の幹部たちは、連絡を密にとりながら一斉蜂起を目指したが、いかんせん今のような十分なコミュニケーションがとれない時代では、各部隊の意見調整が難しい。

そのため、せっかく田代栄助を総理と頂いても、その総理による指揮命令系統は容易に一本化せず、7000人とも8000人ともいわれた武装蜂起軍はバラバラの行動となってしまった。

彼らが勝利した(?)のは、①高利貸の家屋敷の焼き払い、②警察の派出所の襲撃、③村役場の襲撃だけで、その後の行動方針をめぐっては、このまま東京に向けて行軍を続けるべきか、それとも本陣を守るべきかという意見の対立まで生じる始末……。しかし、武装蜂起軍のレベルがその程度であることはやむをえな

いもの。

したがって埼玉県が政府に憲兵隊・鎮台兵の派遣を要請しこれらが到着すると、たちまち蜂起軍は壊滅させられ、幹部たちも次々と死亡あるいは逮捕されていくことに……。

この秩父事件における農民たちの武装蜂起は、今から120年前の1884年11月1日のことだが11月9日には各部隊はすべて壊滅させられてしまった。

このように、身代限（破産）が続出する中、やむをえず政府に反抗して立ち上がった農民たちは、あたかもローマ帝国の圧政に抗して立ち上がった奴隷たちによる「スパルタクスの反乱」（紀元前73年）と同じように、悲しい結末に至った。しかしそれではこの武装蜂起は全く無意味だったのかということそうではない。この秩父事件はたまたま埼玉県で起こったものだが、同種同様の反乱は、高田事件、群馬事件、加波山事件、名古屋事件等全国で多発した。

これらはいずれも鎮圧されたが、そういう悲しい犠牲の積み重ねの中で少しずつ「世直し」が進んでいったと考えるべきだろう。

ホクテンザに拍手！

私がこの『草の乱』を観たのはホクテンザ1だが、大阪府下でこれを上映するのは他に、あべのアポロホールと十三の第七藝術劇場の2館だけ。

前述のような自主製作映画で、しかも120年前の秩父事件をテーマとした難しい(?)映画を上映するについてはその成否に慎重にならざるをえないことは当然。従って、安全にハリウッド大作ばかりを狙う映画館はこんな作品に手を出さないわけだ！

そんな中ホクテンザが手を挙げたことを私は高く評価したい。客の入りはどうかと思って心配していた(?)が、封切初日だったこともあり、ほぼ満席状態。11月13日～26日までの上映期間中この状態が長く続くことを期待するとともに、ホクテンザに大きな拍手を送りたい。

以上、坂和弁護士による武装蜂起談義についての簡単なコメントでした。

2004(平成16)年11月15日記